

ハワイ大学マノア校における 日本文学に関する学生の学びの諸状況

下 楠 昌 哉

はじめに

本稿は、筆者が2016年度同志社大学在外研究の一環として2017年1月5日より同年8月31日まで滞在したハワイ大学マノア校において、日本文学を主に学部生たちがどのように学んでいるかについて概観したものである。筆者は同校日本研究センター（The Center for Japanese Studies）のVisiting Colleagueとして、東アジア言語・文学学科Ken K. Ito教授の指導の下、研究活動を行った。研究の主要な目的は、日本文学における幻想性が英語圏においてどのように研究されてきたかであった。今回の在外研究は、科学研究助成基金助成金 基盤研究(C)課題番号25511017「西欧文化の日本での受容・変容・再発信の過程——文学における幻想性・怪奇性を中心に」（事業期間：平成25年度～29年度）の一部として位置づけられている。この科学研究費による研究は、明治期以後に日本に移入された西洋の文化がどのように日本の文化に取り入れられ、さらに世界に向けて再発信されているかについての文化的なサイクルを研究の対象としている。そこで筆者は主要な研究テーマに加え、アメリカにおいて屈指の日本研究のプログラムを持つハワイ大学における日本文学の教育状況について、調査・報告を試みることにした。調査の中心は、高度な専門教育を指向する大学院教育よりも、一般の学生に日本文学・日本文化とはなんたるかを講じている学部の授業とした。なお、今回の在外研究での指導教員であるIto教授の専門は日本文学であったため、米国政府機関に指導教員と共に研究許諾の申請が必要であったアンケート調査な

どのヒトを対象とした社会学的な研究領域には、本稿の内容は踏み込んでいない。

同志社大学では2006年6月10日に、アメリカの複数のリベラルアーツカレッジが共同で日本学教育を目的として同志社に設置した機関であるAssociated Kyoto Programと、同志社大学国際センターとによる共催で、シンポジウム『リベラルアーツカレッジで日本学を学ぶ／教える』が開催され、その内容は書籍化されて刊行されている（同志社大学国際センター編参照）。シンポジウムは小規模学部教育機関であるリベラルアーツカレッジが中心であり、日本文学関連教育の実例は示されていないが、本稿のために行った調査においては大型総合大学であるハワイ大学の日本文学の教育にも、そのシンポジウムで示された知見に関連する部分が多く見出せた。そのような点に関しては、折に触れて指摘してゆきたい。

1. ハワイ大学マノア校と日本研究

ハワイ大学マノア校は、ハワイ全島で10のキャンパスを有するハワイ大学システムの中の旗艦キャンパスであり、ダウンタウンやワイキキからバスで30分弱の好立地にある。キャンパスの広さは320エーカーにおよび、毎年一万九千人ほどの学生がそのキャンパスで学んでいる。¹ 日本の大学の学部に対応するSchoolもしくはCollegeは18あり、そのうち文芸科学学部（College of Arts and Sciences）は、さらに四つのCollegeに分かれている。そのうちの一つ、言語・言語学・文学学部（College of Languages, Linguistics and Literature）に東アジア言語・文学学科は属している。学位は学士の課程が100、修士課程が85、博士課程が58設置されている。学生はハワイ出身の学生が66%、ハワイ以外のアメリカ人の学生が28%、それ以外の留学生などが6%である。学生の出身は126の国と地域にまたがっている。学生の人種構成では32%がアジア系で、アジア系のうち日系がトップの8.6%を占める。

学生のうち57%が女性であることは、特筆に値しよう。各種の世界大学ランキングでは常に上位1.5%に属し、入学者のSATの平均は、アメリカの大学の全国平均を大きく上回っている（“2015 Fast Fact”）。

ハワイ大学は日本研究に関して、アメリカ国内で最大規模のプログラムを誇っている。2016年1月現在、各学部学科にまたがった日本関連の研究のフルタイム教員が35名、日本語のフルタイム教員が14名おり、毎年100を超える講義が開講され、3500名を超える受講者がいる（Center for Japanese Studies）。リベラルアーツカレッジの一つオベリン大学のアン・シェリフ准教授は同志社におけるシンポジウムで、アメリカにおける日本研究を「さまざまな学問分野の専門家で日本への関心を共通して持っている研究者、教育者の集まり」（70）と表現したが、ハワイ大学の日本研究の体制は、まさしくその言葉を体現している。

ハワイ大学におけるこの日本研究の礎を築いたのが、誰であろう同志社第七代社長（後の総長に相当）、原田助（1863-1940）である。1919年に同志社を辞した後、請われて日本研究の教授として1920年にハワイ大学に着任した原田は研究・教育のみならず、日本に関わる各種の資料収集に奔走し、ハワイにおける日系人社会全体にも大きな貢献を果たした。原田が収集した資料は、現在でも日本研究に関する各種イベントを開催するにあたって活用されている。² こうした研究スタッフとリソースは、現在ではハワイ大学のマノア校に集中しており、マノア校に事務室を持つ日本研究センター（以下、CJS）が、学部・学科間、研究領域間の橋渡しをしつつ各種イベントを举行し、ハワイ大学の日本研究の発展と興隆のために尽力している（“Profile”）。

2. ハワイ大学における日本語・日本文学専攻および副専攻

ハワイ大学において日本研究に携わる研究者たちの所属は上記のように複数の学部学科にまたがっているが、総合大学であるハワイ大学は東アジア

ア言語・文学学科 (Department of East Asian Languages and Literatures、以下 EALL) を有し、そこが集中的に日本語および日本文学関連の講義を開講しているため、学生たちは日本研究ではなく日本語・日本文学 (Japanese) を専攻として取得することが可能となっている。2014年度に学部生で日本語・日本文学を専攻として申告した学生は200名。専攻の申告は1年生の時から行われるため、そのほぼ四分の一にあたる50名程度が日本語・日本文学で学士の学位を取って卒業しているものと思われる。³

それでは、ハワイ大学において学生たちが日本語・日本文学を専攻もしくは副専攻とする場合、どのように授業を履修してゆくことになるのかを概観してみる。ハワイ大学で2016-2017年度に学部生を対象として設置された100の主専攻のうち、30を超える専攻が副専攻とすることが可能である (“Degrees, Minors, and Certificates”; “Undergraduate Admission”)。日本語・日本文学を専攻とできる上述のEALLは、この研究領域の学科ではアメリカ国内で最大の規模を誇る。学士課程には中国語系二つ、日本語系一つ、朝鮮語系二つの計五つの課程が設けられており、学位にはそれぞれの専攻名が付与される。学生たちは、それぞれの言語による文学の研究もしくは中国語・日本語・朝鮮語に関する言語学的な分析を行う。中国語および朝鮮語の専攻の内の一つは、言語のエキスパートをキャリアパスの念頭におく専攻となっている。(日本語系にはこうしたコースがないが、ハワイ大学には日系アメリカ人の学生が多く在学しており、例年、日本語系の専攻が他の二つの東アジア言語系の学生よりも多めの履修者を確保できていることが影響しているよう。) 学部生は自分が専攻する領域の言語を高いレベルで話し、書けるようになることが期待されている。正課科目以外にも学生の異文化理解 (cultural awareness) を深化させるために各種アクティビティが準備されており、海外研修プログラムも準備されている。修士課程および博士課程が準備されているのは日本文学・日本語、朝鮮文学・朝鮮語、中国文学・中国語の三つの領域で、学位は東アジア言語・文学専攻となる (“East Asian Languages and Literatures”)。

日本語・日本文学を主専攻として学士の学位を得るためには、学生はすべての学生に定められている必修科目に加えて、⁴ 日本語プレースメントテストの結果を鑑みつつ36～38単位を取得しなくてはならない。日本語プレースメントテストの結果、語学クラスの飛び級が認められた場合は、プレースメントテストの結果が単位として認められる場合もある。学生たちが取得しなくてはならない単位は、以下の四つのグループに大別される。1) **Reading**の基礎クラスとして、四年生用の日本語の語学クラス、および文学の原典講読、学術論文の講読をする授業などのうちから12～14単位。各クラスの単位は3～4であり、通常の日本語科目が4単位なのに対して、上級者向けの日本語科目は3単位となっている。⁵ このうち、文学の原典講読は複数の講義が準備されており、必ず一つを履修しなくてはならない。原典講読の講義はそれぞれ3単位。2) 基礎的な入門講座として、翻訳を使った日本文学の講義がTraditionalな分野とModernな分野についてそれぞれあり、日本語学入門、日本社会における言語の四つの授業がある。それぞれ3単位でトータル12単位、日本語・日本文学を専攻とする学生はこれらのすべての単位を取得しなくてはならない。3) 日本語・日本文学のセクションが開講している選択必修科目を9単位。言語・文学・文化・翻訳・企業へのインターンシップなど、選択肢は多岐にわたる。授業はどれも3単位である。4) 日本語・日本文学のセクション開講科目以外からの選択必修を9単位。文化人類学科、芸術・芸術史学科、太平洋・アジア研究学部、地理学科、史学科、宗教学科、社会学科、演劇・舞踏学科の科目から日本語・日本文化のセクションによって認められた科目、あるいは中国語・中国文学もしくは朝鮮語・朝鮮文学の講義科目すべてのうちから選択する。それぞれの講義の単位は3単位である(“Japanese B.A. Major Requirements”)。

日本語・日本文学が副専攻にできるようになっていることは、日本文学や文化の受容をハワイ大学の学生たちに働きかけるにあたって大きな意味を持っている。副専攻として認められるにはトータルで最低15単位、語学系の

科目から最低6単位、語学ではない科目から最低9単位を取得する必要がある。語学系科目は、3・4年生向けの日本語科目、各種文献の講読、翻訳、スタディー・アブロード、企業へのインターンシップなどが含まれる。一科目あたり3～4単位である。非語学系科目は三つのグループとなり、言語学、文学、その他のコースとなっている。その他のコースには、沖縄の言語・文学、日本の映画、日本文化についてのカルチュラル・スタディーズが挙げられている(“Requirements of Japanese Minors”)。

3. ハワイ大学大学院における日本文学専攻

大学院教育についても、基本的な単位制とカリキュラムの構成について紹介しておく。リベラルアーツを教育の基本に置くアメリカの大学にふさわしく、ハワイ大学でも日本文学に関して専門性を深めた勉学を志す学生は、大学院に進学することが期待されている。大学院では、研究の対象を言語とするか文学とするかで、取得する科目が明確に区分される。ここでは、文学のみに絞って概略を示す。学生は修士学位を取得するには最低30単位を取得しなくてはならず、通例2年の在学が想定されている。コースは学位論文を執筆するプランAと執筆しないプランBに分かれる。どちらのコースの学生も必修として取らなければならない9単位の中に、語学教育に関わる授業が含まれている。これは、学生のキャリアパスを意識したものと思われる。語学教育関連科目は、東アジア言語教育法・日本語教育実習・日本語教育学入門のいずれかで、どれも3単位科目である。その他の必修2科目は古典文学の講読と研究手法を学ぶセミナーで、どちらも3単位科目である。12単位を取得しなければならない授業群は、詩・近代文学・江戸文学・中世文学・古典文学・テーマ別の講義・伝統的文学理論などで構成され、Modern文学とそれ以前の時代の授業をそれぞれ最低一つずつ履修することが期待されている。講義はどれも3単位である。さらに学生は、言語学もしくは言語教育の科目を3単

位（1科目）履修しなくてはならない。学位論文は6単位となり、最低限の科目を履修してゆくと都合30単位となる。プランBの場合は学位論文に代替する講義として、EALLあるいは他学科開講の日本関連の学部科目を6単位（2科目）履修する。学部で取得した科目のうち、大学院科目としても認められている科目は申請すれば大学院科目の卒業単位として認められる。大学院のみ開講の科目は、プランAは最低12単位、プランBは最低18単位取得することが必要とされている（“The Master of Arts Degree in East Asian Languages and Literatures”）。

博士課程を修了するための要件には以下が挙げられている。日本語に加え、第二外国語としての東アジアの言語を最低2年間の学習をした語学力に相当する実力を有していること。場合によっては、第三外国語にも相応の能力を要求される。最低3セメスターをフルタイムの学生として大学に在籍してコースワークを行い、トータルで24単位を取得する。総合的な知識を問う試験が、四つの分野に関して課される。古典・中世・近代の日本文学の領域に加えて、一分野は日本の芸術・哲学・宗教・歴史、あるいは日本語学、文学理論、別の東アジア文学など、日本文学以外が主題となる。学位論文の準備、執筆、評価などに関しては、「日本文学」を理由に特記されている条件はないため、割愛する（“The Doctor of Philosophy Degree in East Asian Languages and Literatures – Japanese Literature”）。

4. ハワイ大学における日本文学に関わる学部の授業について

ここからは日本に興味を持つ学生たちがハワイ大学EALLの日本語・日本文学セクションの学部教育の授業においてどのように日本文学に接触しているかを紹介する。各授業の詳細に入る前に、これから紹介するすべての授業を下支えしている大学全体としての学習目標（Institutional Learning Objectives）、および日本語・日本文学セクションの「学生が習得を期待され

る結果 (Student Learning Outcomes、以下SLOs)」と、ハワイ大学の授業のナンバリング・システムについて言及しておく。

ハワイ大学は学部生の教育に関して、大学全体として大きく三つの学習目標を提示している。1) 学生は、一般教育と専門教育での学びとハワイの文化と歴史への理解を統合し、ハワイとアジアと太平洋地域を重点におきつつ世界に対する理解を発展させること、2) 学生は、批判的・創造的に思考し、調査を行い、コミュニケーションし、報告する能力を発展させること、3) 学生は、継続した学習と個人としての成長、さまざまな人や文化、特にハワイの文化への敬意、自然環境に対する責務、自らのコミュニティへの市民としての参加を通じて、優秀性、誠実さ、積極性を示すこと、の以上である (Mānoa Faculty Senate 1-2)。⁶

以上の学習目標を達成するために組まれたEALLの日本語・日本文学セッションのカリキュラムのSLOsは、語学三技能Oral, Writing, Reading、適切なリサーチの手法に関するResearch、専門教育のLinguisticsとLiteratureに項目が分かれている。本稿では、LiteratureのSLOsを以下に紹介する。それらは、1) 日本文学の主要な作家・作品・特徴・表現形式・文体を、近代およびそれ以前の時代双方において特定し、説明できるようになること、2)日本語の詩・散文・演劇の作品を翻訳と原典の日本語双方で読み、それぞれのジャンルに適切な用語を使用して分析し、解釈すること、3)日本文学を社会的・歴史的・知的・宗教的文脈において位置づけ、評価できるようなること、である。ウェブサイトで紹介されているカリキュラム・マップでは、それぞれのSLOsに対応する授業が紹介されている (“Japanese BA SLOs and Curriculum Map”)

個々の授業すべてに付されているハワイ大学のナンバリング・システムの基準は、学部生向けの授業の場合、100番台が初級もしくは入門用、200番台が各研究領域での学びを深化させるための2年次のためのクラス、300～499番までが3年次もしくは4年次のための専門のクラスで、大学院の卒業に必要な科目として認められるものもある (“Course Numbering System”)

続いて、日本文学関連の個々の授業を見てゆく。日本文学の学びへの導入となるのが200番台の二つのクラス、EALL271 “Japanese Literature in Translation—Traditional” およびEALL272 “Japanese Literature in Translation—Modern” である。時代区分は明治以後の近代文学がModern、それ以前の時代の作品がTraditionalとされている。なお、シラバスなどでClassical Literatureという言葉が使われる場合は、江戸時代を含まないそれ以前の古典文学を指す。これらの用語は学内の授業内容の区分のために使用されており、その用法は、文学史を説明するために使われる一般的な語句の使い方と常に合致するものではない。カリキュラムに日本文学史に特化した授業はないため、文学史に関する知識はこれらの授業を通じて学生に伝えることが期待されている。授業で取りあげる作品は、英語に翻訳されたものを読む。シラバスにはどれもSLOsが明示されており、ウェブ上で確認できる。ここ数年のこれらの授業クラスターのSLOsとされているのは、若干の異同はあるものの講師を問わず、前述の日本語・日本文学セクションとしてのSLOsにほぼ準拠している。ただし、「日本語でテキストを読む」という項目は、この授業のSLOsには含まれない (“EALL Courses”)。各講義で扱う作品の選択は講師に任されるが、東アジア言語・文学学科長Robert Huey教授によると、Traditionalであれば「古典日本文学大系」に出てくるような作品を各時代それぞれ最低一つずつ取りあげることが念頭に置かれており、基礎知識として抑えておくべき名作を学生たちに紹介するのは担当者の共通理解とされている。

しかしながら、何を日本文学の「^{キヤノン}正典」としてとらえ、それを教えるかに関しては、アメリカで教鞭を執っているからこそ、担当者が自分なりの思索を深める必要もあるようである。「はじめに」で述べた同志社大学でのシンポジウムにおいて、アーモスト大学のサムエル・C・モースは自身の日本美術概説クラスを紹介しつつ、アメリカで日本美術史を扱う講義においては日米双方の研究の動向を受けて「ある作品を扱い、他の作品は取りあげないその動機」について教鞭を執る者が真摯に考えることが要請されており、日本

の外にいる学生たちが一学期間、そのクラスのみでしか日本美術に触れない可能性があるからこそ、その「取捨選択」が重要であることを訴えた(120)。モースの議論が文学に関しても通じるものであることは、Ken K. Ito教授が2013年度春学期開講のEALL272のために選んだ作品群からうかがえる。Ito教授のシラバスで、75分授業週二回十五週で読むことになっているModernの時代の作品は以下の通り。二葉亭四迷『浮雲』、樋口一葉『たけくらべ』、田山花袋『布団』、島崎藤村『破戒』、森鷗外『キタ・セクスアリス』・『阿部一族』、夏目漱石『こころ』、志賀直哉「城之崎にて」、谷崎潤一郎『蓼食う虫』、川端康成『雪国』、山之口獏の短編小説「天国ビルの斎藤さん」、宇野千代『色ざんげ』、太宰治『斜陽』、三島由紀夫『仮面の告白』、円地文子『女面』、金達寿『富士のみえる村で』(“EALL 272”)。大部分が文学史上名作とされる「純文学」の作品だが、沖縄の詩人の山之口獏や在日朝鮮人文学の黎明期を代表する金達寿など、日本文学史では「周縁」の作家とされることが多い作家も取りあげられている。ポストコロニアル研究の勃興や、日本文学をアジアの中に位置づけなおす視点など、昨今の研究動向が織り込まれたうえで、作品の選択が行われているのであろう。なお、この授業においては、assignmentとして夏目漱石の『こころ』や島崎藤村の『破戒』をすべて読んでくることになっている授業回もあり、翻訳でよいとはいえ、学生たちは相応の時間をかけて予習を行うことが期待されている

EALL開講の300番台のクラスにおいては、特定のトピックに重点を置いた講義が展開される。学生たちは自分の興味がある時代やメディア、切り口によって授業を選び、学びを深めてゆく。2016年春学期に開講されていた日本文学関連の科目は以下の通り。EALL 325D “Japanese Film: Art and History,” EALL 371B “Japanese Prose: Literary Miscellany,” EALL 372B “Modern Japanese Literature: Fiction,” EALL 375 “Japanese Cultural Studies: Cultures of Empire and Colonialism”。内容は、各講師が授業のタイトルに従って得意分野を講じていると考えてよいだろう。例えば、2017年春学期のIto教授担当のEALL 325D

“Japanese Film: Art and History”では、映画にアダプテーションされた文学作品が扱われていた。学生は映画を見るだけでなく、原作の文学作品も読むのも課題とされ、文学と映画双方における語り (narrative) について考察を深めることが求められている。取りあげられていた文学作品は芥川龍之介「羅生門」・「藪の中」、森鷗外『雁』、大岡昇平『野火』、谷崎潤一郎『鍵』、井伏鱒二『黒い雨』などである。対応する映画は、1950・60年代に映画化された作品が中心となっている (“EALL 325D”)。2014年春学期のIto教授担当のEALL 372B “Modern Japanese Literature”は、授業の副題が“Food and Identity in Modern Japan”とされており、明治期以降の日本文学に描かれた食の諸相について講義が行われた。課題とされた作品は岡倉天心『茶の本』(1906) から吉本ばなな「キッチン」(1987)、宮崎駿監督『千と千尋』(2001) まで。「食」を手掛かりに、20世紀を通じての日本文学の変遷が、時にジャンルを越えつつたどられていた (“East Asian Languages and Literatures 372B”)。

Traditionalな作品を扱う授業クラスターからも一つ見てみよう。EALL 371B “Japanese Prose: Literary Miscellany”の正式なクラス名は、“Traditional Japanese Literature: Prose Fiction and Literary Miscellany”であり、Traditionalな文学に関して特定のトピックを取りあげる授業である。2017年度春学期開講のクラスは、平安時代から江戸時代にかけての「女性」の語りがトピックだった。使用テキストは『源氏物語』、『徒然草』、『とわずがたり』、『好色一代女』の翻訳であった (“EALL 371B—Traditional Japanese Literature: Prose Fiction and Literary Miscellany Spring 2017”)。この授業の担当は前述のRobert Huey教授で、特定のトピックを取りあげつつ、日本古典の名作を授業で読むテキストに手堅く据えている。

400番台のクラスにおいて、学生たちはいよいよ日本文学の原典と本格的に向き合うことになる。この400番台のクラスではっきり日本文学を主題としているのは、JPN407E “Readings: Modern Literature”である。日本文学関連のこの番号のクラスでは、知識だけでなく語学力の向上と文学研究の手

法の習得も目標とされている。JPN407を冠したもう一つの講義、JPN407D “Readings: Academic and Journal Texts”は学術論文を講読するクラスであることが、JPN407Eの授業としての性格を端的に示している。JPN 407EのSLOsは、2015年春学期・2016年春学期・2017年春学期と、担当講師が変わっても共有されている。学生たちが、1) 日本語の書き言葉の文章の構造や意味を分析する力を進歩させること、2) 短い語りのキーとなる形式的な特徴を同定し、調査する手法を学ぶこと、3) 語りの主題を認識し、評価する経験をすること、4) 適切な参考文献のソース——主としてウェブ上にあるもの——を使う能力を得ること、である(“Japanese Courses”)。すなわち、学部教育のレベルでは、日本文学の原典の短いものを、時間をかけて読むところで学習は終了する。より高度な学習内容は、大学院教育に託される。

Ito教授が2016年に開講したJPN407Eでの使用テキストには、「シブい」セレクションが並ぶ。夏目漱石『硝子戸の中』から幾編か、芥川龍之介「蛙」・「女体」・「不思議の島」、川端康成『掌の小説』から幾編か、村上春樹「とんがり焼きの盛衰」、吉本ばなな「みどりのゆび」(“Japanese Courses”)。この授業で、ほとんどの学生たちは語学教材としてコントロールされていない「生」のテキストに初めて触れる。従って、文法的な説明を含んだ授業進度はゆっくりとしたもので、75分の講義で書籍の2頁程度の進度となるそうである。そうした状況を反映して、夏目漱石の『硝子戸の中』が新聞連載の随筆、川端康成の『掌の小説』が文字通り「超」短編を集めた短編集であることからわかるように、授業で扱われる作品は一つ一つ、短いものが多い。あえて有名作品を選んでいないのは、学生が簡単に参照できる既存の翻訳がないことも一因だろう。また、芥川の作品にみられるように、寓話的な作品も目立つ。Ito教授によると、学生がディスカッションをするテーマを設定しやすいことが選定の理由の一つだそうである。短く寓話的な作品には幻想味溢れる設定のものも多く、学生たちには外国語としての日本語から非現実的な情景を想像することが要求される。

作品そのものに関しては、日本人の間でも一般にそれほど知られていないテキストが教材として選定されているものの、選ばれた「作家」に着目してみると、「英語圏における」日本文学の正典作家を堅実に選んでいるのがわかる。漱石・芥川・川端は押しも押されもせぬ近代日本文学史における大物作家であるが、日本文学を英語の「翻訳」で読む読者にとっては、村上春樹と吉本ばななは定番中の定番の作家なのだ。英語圏において彼らの作品は「純文学」とも「大衆文学」とも分類しきれない「中間 (in-between)」の文学とされ、1980年代以降の日本文学のトレンドを示す代表的な例としてとらえられている (Ellis 200)。

これらの授業をどう進行させるかは各教員の裁量に任されているが、作品を事前に読んだうえで学生同士がディスカッションを行う時間が設定されている授業が多いため、ほとんどの講義は日本でのゼミに近い形態と言える。ある時代やトピックをもとに多くの作品を概観するクラスでも、15人から25人の履修制限がかかっている。履修希望者が多い場合は、基本的に学年が上の学生が優先される。また、ハワイでは書籍、特に外国語の書籍に関して入手状況が芳しくないため、ウェブ上に簡単に読むことができるテキストが存在する場合、その事実は積極的に学生たちに知らしめられている。日本文学の授業で取りあげるテキストの著作権が切れている場合には、ウェブ上の青空文庫が使用されることもある。さらに各教師とも学内クロードのウェブによる学習支援システムLaulimaを活用し、必要に応じて教材をそちらにアップしている。⁷

実際に授業見学をしたあるベテラン教員のクラスでは、ディスカッションのテーマとして作品内容の基本的な事項に加え、学生側から気になった点やテーマなどを募り、学習者中心の (learner-centered) 授業が展開されていた。担当教員曰く、時代をある程度遡った異国のテキストであっても、学生の生活と何らかのリンクを持たせるのを意識して授業を展開している、とのことだった。この授業形式には、教員の経験と柔軟な対応力がある程度必要であ

るのは明白で、事実この教員は、不規則で、それでいて時に鋭い発言をする学生と適宜コミュニケーションしつつ、その学生の発言を活かして巧みに授業の流れをつくっていた。この授業の教科書は紙の本の形態で出版されているが、その書籍が特定のデータベースに収録されている場合は、学生たちは図書館からデータでその書籍を「借り出す」ことが可能である。(一定期間後、その書籍のファイルはダウンロードした端末から自動的に削除される。) よって受講者のなかにはラップトップやタブレットに収められた教科書を使用している学生が何人かおり、スマートフォンで読んでいる学生すら若干名いた。⁸

5. 日本研究センターのイベントとその背景

ハワイ大学における正規の学部教育外では、CJS、日本研究センターが中心となって月に2回ほど学内で举行される日本研究関連のイベントが、ハワイ大学マノア校での日本に対する学生たちの興味を惹起するために大きく寄与していた。日本研究の長い歴史を誇るハワイ大学にふさわしく内容は多岐にわたり、かなり高度な題材が取りあげられる場合もあった。例えば、2017年2月3日に開催されたアニメーション映画の無料上映会でかけられた映画は、杉浦日向子の漫画を原作とした『百日紅～Miss HOKUSAI～ (Miss Hokusai)』で、上映後のハワイ大学教員による質疑応答に曰く「プロットがないように見える」高い前衛性を持った映画だった。上映前には日本美術が専門のJohn Szostak芸術・芸術史学科教授のイントロダクションが付されていた。また、2017年2月16日にハワイ大学ハミルトン図書館で開催された、国文学研究資料館・EALL・CJS・ハミルトン図書館共催の「源氏物語のストーリーと天皇制 (The Plot of *The Tale of Genji* and the Emperor System)」と題された国文学研究資料館館長、今西祐一郎博士の公開講座は、インターネットによる事前登録が必要だったにもかかわらず、図書館内の90名ほどを収容する会場はほぼ満員であった(講演は日英の逐語通訳付き)。⁹ その他にも、

2017年3月12日に開催された山田雄司三重大学教授と川上仁一三重大学特任教授による「忍者」の歴史的文脈についての講演など、多彩な講演やイベントがCJSの主催、もしくは共催で開催されていた。

このようにハワイ大学のCJSが、一見「マニアック」なイベントを打つためには、日本に興味を持っているアメリカの学生たちがすでにある程度日本文化の洗礼を受けていることがあげられよう。1990年代以降、日本文化、特にそのポップカルチャーのグローバル化が促されたことにより、日本のアニメやマンガは世界のいたるところで受容された。さらには、インターネット経由でそれらに関する情報は簡単に手に入れられるようになってきている。¹⁰ リベラルアーツカレッジの一つ、スミス・カレッジのマキ・H・ハバード准教授は、自分の大学で日本の言語と文化を学ぶ学生たちを「日本文化のグローバル化の落とし子といえなくもない」と評している(31)。ハワイでもその状況は例外ではなく、多くの日系移民を受け入れ、現在でも日本から多くの観光客が訪れる環境を考えれば、むしろアメリカ本土の学生たちにとってより、ハワイの学生たちにとって日本ははるかに近い存在であるだろう。実際、ホノルルでは日本のアニメ・マンガを中心としたイベント、カワイイ・コン(Kawaii Kon)が毎年開催されており、筆者自身が視察した2017年4月7日～9日開催の同コンベンションは、日本のアニメのキャラクターに扮したコスプレイヤーたちが数多く集い、熱気に溢れていた。知人が顧問を務める地元公立ワシントン中学校の日本文化クラブではこのイベントに参加することが生徒たちの大きなモチベーションになっており、大会参加費(3デイパスは48ドル)を賄うために、ファンド・レイジングを行っているそうである。¹¹このように日本のポップカルチャーにある程度精通した学生が珍しくない現状においては、CJSが企画するイベントの多くが、一般の学生への週及を目指しつつも、専門的に踏み込んだ企画となるのは無理なからぬことといえよう。

6. おわりに

本稿では、ハワイ大学マノア校における学生たちの日本文学の学びについて、その概観を示そうと試みてきた。日本は、特に明治維新以後、西洋文学・文化から様々な想像力の源泉を搾取し、咀嚼し、吸収し、それを自家薬籠中のものとして、様々な文化的メディアによって世界に再発信してきた。その再発信の過程においては視覚的情報のアドバンテージのあるアニメや漫画が目立った存在であるのは論を俟たないが、近年は英語への優れた日本語翻訳者が多数現れ、エンターテインメント系を中心に文学も海外で一定の注目を集めるようになってきた。こうした現状を踏まえ、アメリカ全体の中で優れた日本研究の拠点となってきたハワイ大学において、日本文学や文化がどのように講じられているかの調査を行った次第である。

印象深かったのが、東アジア言語・文学学科開講の日本文学を扱う各講義において示されていた、日本文学の正典を「はずさない」姿勢だった。芸術・芸術史学部などの他学部他学科でも日本文化の諸相を扱う講義があるからかもしれないが、ポップカルチャーを総花的に扱う科目はほとんどみられず、翻訳に頼ってではあるが、古典・近代を問わず日本文学の名作にあたり、そのテキストについて教員と学生がディスカッションする基本方針は、見学を許されたり、シラバスを確認したりした各クラスで共通して貫かれていた。また、どの時代の題材を扱うにせよ、学生たちの「今・ここ」に結びつく視点を講義において提示する意識も、各教員で共有されていたように思う。長らく日系人社会が存在し、多くの日本人が行き来するハワイでは、日本に対する理解を深めようとしている学生数は今でも多い。今後もハワイ大学で日本語・日本文学を専攻した学生たちが、紫式部、清少納言、近松門左衛門、芥川龍之介、太宰治、谷崎潤一郎らがどんな作品を書いたのかについての知識を当然の教養として携え、学び舎を巣立ってゆくことを祈念したい。

謝 辞

本稿は、科学研究助成基金助成金 基盤研究(C)課題番号25511017「西欧文化の日本での受容・変容・再発信の過程－文学における幻想性・怪奇性を中心に」(事業期間:平成25年度～29年度) および、2016年度同志社大学在外研究の成果の一部である。執筆にあたっては、指導教員を引き受けていただいたKen K. Itoハワイ大学教授、Robert Hueyハワイ大学東アジア言語・文学学科長、Lonny E. Carlyleハワイ大学日本研究センター長、Gay Michiko Satsumaハワイ大学日本研究センター副所長、Tokiko Yamamoto Bazzellハワイ大学ハミルトン図書館日本研究司書、Andre Haagハワイ大学助教授、Neal Takamotoワシントン公立中学校教諭をはじめとして、多くの方々から資料および情報の提供をいただいた。この場を借りて心よりの感謝を。

註

- 1 2015年秋学期の履修登録者は学部生13689人、大学院生5176人であった(“2015 Fast Fact”)。
- 2 Ota and Oshiroを見よ。原田が礎を築いた図書館資料活用の一例を挙げると、後述のハワイ大学ハミルトン図書館で開催された国文学研究資料館館長、今西祐一郎博士の公開講座に先立って、2017年1月13日～3月31日まで「源氏物語のいろいろ (Many Facets of *The Tale of Genji*)」と題された展示が行われていた。
- 3 ハワイ大学の大学のウェブサイトで“Common Data Set”として毎年公表されているデータ一覧なかで、学位取得者の内訳は“Foreign languages, literatures, and linguistics”として一括をしてまとめられている。2014-15年度は151名がこの分野で学士の学位を得ている。このうち、日本語・日本文を専攻する学生がかなりの割合を占めている様子がうかがえる (“Reports”)。
- 4 一般教育 (General Education) とされている授業群は、基礎科目であるFが付された授業科目群、学生に多様な学びの機会を与えるための、各学科が開講するGが付された授業科目群、Fの科目群で得た知見とアカデミックなスキルをさらに深化、発展させるFocus群、そしてハワイ語もしくは第二外国語である (“Manoa Undergraduate General Education Requirements”)。
- 5 ハワイ大学の単位の計算は、講義当たりの時間数が基準となっている。1単位時間 (credit hour) は50分で、最大16週間にわたって行われる各講義の単位時間数によって、それに対応した単位が付与される (“Student Information Systems (SIMS) Definitions”)。大半の授業の単位は、3単位もしくは4単位である。ほとんどの講義

- は週あたり2日もしくは3日開講され、授業時間は75分の場合と50分の場合がある。
- 6 これら大学としての学習目標は、ウェブサイトに掲載されていた文言を筆者が翻訳した。以下に出てくる各種のSLOsも同様。
 - 7 教材を無償でOER (Open Educational Resources) として学生に提供することは、アメリカ全体の大学教育のトレンドでもある。ハワイ大学でもOERの使用を学内で促進するためのUH OER Teamが活動を行っている (“UH OER Team”)。
 - 8 授業見学は、2017年4月13日ハワイ大学マノア校にて行った。担当教員の方のご希望に沿って、名前はここに記載しない。また2017年5月2日にも、別の教員の方の授業見学を行った。こちらは15人の受講制限がかかったクラスで、担当教員はウェブ上の映像とパワーポイントを駆使しつつ、50分の講義で全ての学生にテキストの朗読なり発言なりを行わせるよう腐心していた。
 - 9 同日、国文学研究所とハワイ大学言語・言語学・文学学部 (College of Languages, Linguistics, and Literature) との間で、MOU (了解覚書、Memorandum of Understanding)の締結がなされた旨、発表がなされた。
 - 10 海外における日本に興味を持つ大学生に対するアニメ・マンガについては、6年にわたり世界の四地域10か国についてアンケート調査を行った労作、薄葉彬貢『世界アニメ・マンガ消費行動レポート』(2014)があり、「多少癖がある」スタンスから「アニメやマンガが世界で人気があるはずがない」(3) といういささか衝撃的な結論が導き出されている。半面、この綿密なアンケート調査は、日本と全く同じ形でアニメやマンガを消費してはいないものの、それぞれの地域の環境に合わせて独自のやり方で日本のアニメやマンガを愛好し、コミュニティを作って活動を行っている人々が世界中にいることをはっきりと示している。
 - 11 同校日本文化クラブ顧問、ニール高本氏からの情報提供による。なお、アメリカでは子どもたちが自分の希望を実現するために、何らかのアクティビティを行うことで近隣の人々から出資を募ることは慣行として定着している。カワイイ・コンでは、SFやファンタジー系の作品が多く取りあげられている一方で、スポーツ系のアニメやマンガ、活字系のメディアはほとんど存在感がなく、日本的な文化とは言えないボードゲームや中世武術 (Medieval Martial Arts) のコーナーがあるなど、このイベントそのものが興味深い研究対象となりうる。

参考文献目録

- “2015 Fast Facts.” *University of Hawai’i at Mānoa*. University of Hawai’i at Mānoa, n.d., manoa.hawaii.edu/miro/wp-content/uploads/2014/06/FastFacts2015_11_17_2015.pdf. Accessed Jan. 19, 2017.
- Center for Japanese Studies, University of Hawai’i at Mānoa. “Japanese Studies at UHM.” Jan. 13, 2016. Handout, 13 Jan., 2016, given by Gay Satsuma, Apr. 20, 2017.
- Center for Japanese Studies, University of Hawai’i at Manoa*. Center for Japanese Studies, n.d., www.hawaii.edu/cjs/. Accessed Jan. 31, 2017.
- “Course Numbering System.” *2016-2017 Catalog, University of Hawai’i at Mānoa*. Manoa Catalog Office, University of Hawai’i at Mānoa, n. d., www.catalog.hawaii.edu/courses/description-index.htm. Accessed Jan. 23, 2017.
- “Degrees, Minors, and Certificates.” *2016-2017 Catalog, University of Hawai’i at Mānoa*. Manoa Catalog Office, University of Hawai’i at Mānoa, n. d., www.catalog.hawaii.edu/degrees/degrees-cert.htm. Accessed Jan. 18, 2017.
- “The Doctor of Philosophy Degree in East Asian Languages and Literatures – Japanese Literature, at the University of Hawai’i at Manoa.” *East Asian Languages and Literature, University of Hawai’i at Mānoa*. East Asian Languages and Literature, University of Hawai’i at Mānoa, Oct. 26, 2015, www.hawaii.edu/eall/download/Japanese-PhD-literature-rev-2015.pdf. Accessed Jan. 30, 2017.
- “EALL 272, Japanese Literature in Translation—Modern.” Class handout, n. d., given by Ken. K. Ito, May 3, 2017.
- “EALL 325D, W1, Spring 2017.” Class handout, n. d., given by Ken K. Ito, May 3, 2017.
- “EALL 371B—Traditional Japanese Literature: Prose Fiction and Literary Miscellany Spring 2017.” Class handout, Jan. 8, 2017, given by Robert Huey, Apr. 13, 2017.
- “EALL Courses.” *East Asian Languages and Literature, University of Hawai’i at Mānoa*. School of East Asian Languages and Literature, n. d., www.hawaii.edu/eall/eall-courses/. Accessed Feb. 3, 2017.
- “East Asian Languages and Literatures.” *2016-2017 Catalog, University of Hawai’i at Mānoa*. Manoa Catalog Office, University of Hawai’i at Mānoa, n. d., www.catalog.hawaii.edu/schoolscolleges/arts-sciences/departments/eall.htmJan. Accessed 18, 2017.
- “East Asian Languages and Literatures 372B, Spring 2014: Modern Japanese Literature.” Class handout, n. d. given by Ken K. Ito, May 3, 2017.
- Ellis, Toshiko. “Literary Culture.” *The Cambridge Companion to Modern Japanese Culture*. Ed. Yohio Sugimoto. Cambridge UP, 2009, pp. 199-215.
- “Japanese B.A. Major Requirements.” *East Asian Languages and Literatures, University of*

- Hawai'i at Mānoa*. School of East Asian Languages and Literatures, University of Hawai'i at Mānoa, Aug. 2016, www.hawaii.edu/eall/download/JPN-BA-Major-rev-08-16.pdf. Accessed Jan. 27, 2017.
- "Japanese BA SLOs and Curriculum Map." "Curriculum Map." *College of Languages, Linguistics & Literature*. College of Languages, Linguistics & Literature at the University of Hawai'i, Apr. 26, 2010, www.lll.hawaii.edu/eval/resources/F10/cm_JapaneseBA.pdf. Accessed Feb. 26, 2017.
- "Japanese Courses." *East Asian Languages and Literature, University of Hawai'i at Mānoa*. School of East Asian Languages and Literature, n. d., www.hawaii.edu/eall/japanese/jpn-courses/. Accessed Feb. 3, 2017.
- "Japanese Graduate Programs." *East Asian Languages and Literature, University of Hawai'i at Mānoa*. School of East Asian Languages and Literature, n. d., www.hawaii.edu/eall/jpn-grad-programs/. Accessed Jan. 30, 2017.
- Mānoa Faculty Senate. "Academic Policy, M5. 321: Institutional Learning Objectives for Undergraduate Students." *University of Hawai'i at Mānoa*. University of Hawai'i at Mānoa, May 2, 2012, manoa.hawaii.edu/ovcaa/policies/pdf/M5.321.pdf. Accessed Feb. 24, 2017.
- "Manoa Undergraduate General Education Requirements." *2016-2017 Catalog, University of Hawai'i at Mānoa*. Manoa Catalog Office, University of Hawai'i at Mānoa, 2016-17, n. d., www.catalog.hawaii.edu/corerequirements/. Accessed Jan. 23, 2017.
- "The Master of Arts Degree in East Asian Languages and Literature, University of Hawai'i at Mānoa: Japanese Literature." "Japanese Graduate Program," May 2011, [www.hawaii.edu/eall/download/JLit%20May%202011%20rev\(2\).pdf](http://www.hawaii.edu/eall/download/JLit%20May%202011%20rev(2).pdf). Accessed Jan. 30, 2017.
- Ota, Masao, and George M. Oshiro. "Mediator Between Cultures: Tasuku Harada and Hawaiian-Japanese intercultural relations in the 1920s." *The Hawaiian Journal of History* no. 33 (1999): pp. 171-201. "Profile," evols.library.manoa.hawaii.edu/bitstream/handle/10524/598/JL33177.pdf?sequence=2. Accessed Jan. 30, 2017.
- "Profile: Japanese Studies at the University of Hawaii." *Center for Japanese Studies*, n.d., www.hawaii.edu/cjs/about-us/. Accessed Jan. 31, 2017.
- "Reports." *Mānoa Institutional Research Office*. 2010-17. University of Hawai'i at Mānoa, 2010-17, manoa.hawaii.edu/miro/reports/#efs-tooglepane-1-0. Accessed Feb. 3, 2017.
- "Requirements of Japanese Minors." "Japanese Undergraduate Programs." *East Asian Languages and Literature, University of Hawai'i at Mānoa*. East Asian Languages and Literature, University of Hawai'i at Mānoa, Sep. 2016, www.hawaii.edu/eall/download/Japanese-Minor_rev-09-16.pdf. Accessed Jan. 27, 2017.
- "Student Information System (SIMS) Definitions." *University of Hawai'i at Mānoa*.

- University of Hawai'i at Mānoa, 2016, www.hawaii.edu/iro/simsdef.php. Accessed Feb. 11, 2017.
- “UH OER Team.” *OER at UH*. University of Hawai'i, n. d., oer.hawaii.edu/uh-oer-team/. Accessed Mar. 2, 2017.
- 同志社大学国際センター編『アメリカの日本学教育－リベラルアーツカレッジにおける日本イメージの再生』大巧社、2007年。
- ハバード、マキ「日本語・日本文化教育＝あぶない仕事？」同志社大学国際センター編、26-44頁。
- モース、C・サムエル「リベラルアーツカレッジの日本美術概説クラス」同志社大学国際センター編、115-28頁。
- シェリフ、アン「馬に乗った宣教師－歴史的観点からみたりベラルアーツカレッジと日本研究」同志社大学国際センター編、63-74頁。
- 薄葉彬貢『世界アニメ・漫画消費行動レポート』薄山館、2014年。

Synopsis

Learning Environments for Students Studying Japanese Literature at the University of Hawai'i, Mānoa

Masaya Shimokusu

This article explains how students study Japanese literature at the Mānoa campus of the University of Hawai'i. UH boasts one of the biggest Japanese studies programs in the United States, and its courses and staff are concentrated on the Mānoa campus, the flagship one of the University-of-Hawai'i system. The foundation of UH's Japanese Studies program was laid by the 7th chancellor of Doshisha University, Reverend Dr. Tasuku Harada. Students at UH can choose Japanese either as a major or as a minor, focusing on Japanese literature, or on analysis of the Japanese language. Students of the Japanese major or minor are required to obtain proficiencies in Japanese, taking elective and required classes (depending on what their particular course of study is). Students deciding to focus on Japanese literature study it in translation from the first to third year; in the final year, they tackle literary texts in the original Japanese. Students who wish to study Japanese literature further enter graduate school. Most courses in Japanese literature fall within one of two divisions: Traditional and Modern. The former refers to pre-modern literature, while the latter refers to literary works composed after the Meiji Restoration. Students do not take a single, large lecture class offering a broad, unified view of Japanese literature. Instead, students study in smaller classes of about 15-25 members. Lecturers assign classical literary works and reflect, in the approaches they take, a

variety of schools within literary theory. Students are typically expected to read assignments before each class meeting, and also to participate in class discussion. Lecturers are encouraged to assign texts that are in the public domain (or which are otherwise available at no cost); and they favor texts that are accessible in online archives or that may be borrowed, as e-texts, from the university's library (many students read on tablet-computers or smartphones). During each academic year, the Center for Japanese Studies at UH-Mānoa also organizes lectures and events related to Japan at a rate of about twice a month.